



A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。
※倍率100%の場合

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かすかな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などは、てんでまるで、違っちがっていらっしやる。弟の直治なおじがいつか、お酒を

飲みながら、姉の私に向つてこう言った事がある。

「爵位しやくいがあるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位が無くても、天爵というものを持つている立派な貴族のひとつもあるし、おれたちのように爵位だけは持つていても、貴族どころか、賤民せんみんにちかひのものもある。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊廓ゆうかくの客引き番頭よりも、もつとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井やない（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしよう、タキシードなんか着て、なんだつてまた、タキシードなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかつたのには、げつとなつた。気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等御下宿おんと書いてある看板が本郷あたりによくあつたものだけでも、じつさい華族なんでももの大部分は、高等御乞食おんこじきとでもいつたようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのもんだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スープのいただきかたにしても、私たちなら、お皿さじの上にすこしうつむき、そうしてスプーンを横に持つてスープを掬すくい、スプーンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけれども、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁ふちにかけて、上体をかがめる事も無く、お顔をしゃんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプーンを横にしてきつと掬つて、それから、燕つばめのように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかにスプーンをお口と直角になるように持ち運んで、スプーンの尖端せんたんから、スープをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見わきみなどなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプーンをあつかひ、スープを一滴もおこぼしになる事も無いし、吸う音もお皿の音も、ちつともお立てにならぬのだ。それは所謂いわゆる正式礼法になつたいただき方では無いかも知れないけれども、私の目には、とても可愛かわいらしく、それこそほんものみたいにに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御乞食おんこじきなのだから、お母さま

のようにあんなに軽く無雑作むざうさにスプウンをあやつる事が出来ず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、所謂正式礼法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スープに限らず、お母さまの食事のいただき方は、頗る礼法すじがたにはずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、きつきと全部小さく切りわけてしまつて、それからナイフを捨て、フォークを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆつくり楽しそうに召し上がつていらつしやる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひよいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらつしやる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがなさると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜さいのハムやソーセージなども、ひよいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」

とおつしやつた事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があるけれど、私のような高等御食ごうご食が、下手に真似まねしてそれをやつたら、それこそほんものの乞食の凶あやむになってしまう。いそうな気もするので我慢している。

弟の直治でさえ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望ぜつぼうみたいなものをさえ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であつたが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐きつねの嫁入りと鼠ねずみの嫁入りとは、お嫁のお支度しよどがどちらがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになつて、あずまやの傍そばの萩はぎのしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もつとあざやかに白いお顔をお出しになつて、少し笑つて、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」
とおつしやつた。